

尾形 仿編

談林御論集

—

古典文庫

尾形 仿編

談林俳論集

古典文庫

古典文庫第一九三冊

昭和三十八年八月二十日 印刷発行 ©

(非売品)

編者 尾形 仿

発行者 吉田 幸一

集論俳林談
(一)

印刷者 東京都板橋区熊野町三四
帝都印刷製本株式会社

発行所

東京都(王子局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

凡例	三
近来俳諧風躰抄上(岡西惟中)	五
近来俳諧風躰抄中	六一
近来俳諧風躰抄下	一二五
(付録)	
一夜菴建立縁起(岡西惟中)	一八五
興昌寺藏「筆海帖」抜抄	二二三
解題	二三三

凡 例

一、本書は、談林俳論集の第一冊として、岡西惟中撰『近来俳諧風躰抄』上中下三巻を収め、なお付録として、岡西惟中撰『一夜菴建立縁起』および讃岐観音寺の興昌寺蔵「筆海帖」抜抄を添えた。

二、『一夜菴建立縁起』には、行間に、興昌寺蔵宗鑑・宗因・惟中らの自筆卷子本との校異を示した。

三、「筆海帖」は、談林関係俳人の作を底本の順に抄出し、底本にある各作家の俗名等に関する注記をカッコ内に併記した。

四、校訂については、できるだけ原本の体裁を伝えることに努めたが、文字は、平仮名の「ニ」「ハ」「ミ」以外、すべて現行の字体に統一した。

五、また、繙読の便をはかつて、私に句読点・濁点を補った。序文の句点、および本文の片仮名のふり仮名ならびに（ママ）と傍記した濁点は、初めから底本に付してあつたものである。なお、漢文の返り点・送り仮名は、底本のままに

従い、手を加えなかつた。

五、本書の作成に当つては、興昌寺蔵の諸資料の撮影について香川大学の藤川正数氏の多大の尽力に預り、また原稿の浄書等について湯沢賢之助君の助力を蒙つた。しるして謝意に代えたい。

近来俳諧風躰抄

近来俳諧風躰抄序

少林の捨坊主の笛には。穴あらざれども。その音高く聞ゑ。陶家のお祖父の琴には。絃なけれ共。その声遠く到りぬ。もし口にあてひやりと吹。ゆびに引てちりてんとならさバ二に落来らむか。抑俳諧の道も又しか也。その詞はあらざれども、秋毫の先こまかなる作意には。泰山の大きいなる寓言をなさずといふ事なし。是只妙中の活機とやいハん。格外の風顛とやいハん。爰に一時軒の主なる人。俳に参ずる事。禅に参ずるごとくして、鷲直に西江水のそいふかき理味を。とつくりとのミこみ悟り得て。老婆親切のあまりに。卑諺の和歌のうらの舟

をきざみて。劔のかねの堅く覺てこれを尋ね。滑稽の筑波の山の株クイゼを守りて。兎の尻シリのあながちになづミたる。檐板漢ダンハンカンに雷喝ライカツをなし、びつくりと肝をつぶさせ。電棒デンボウをあたへて。ぐにやりと腰をなやして会エせしめんと心の心から。曲マデて人情に随ひ。俳諧風躰抄を集てなせり。あハやそれかの無孔クの笛の哥口クハシヨツの換骨備ムハリ。没絃ムケンの琴の引事の。翻案ホンアンたしかなる冊子サツシなりけらし。無耳ムニの耳して。無音の音をきかん人はよくきけ。必雲井を驚すべきことハリじやもの。く。じやくもの。じやもの。のほんのほん屋に命じて。梓にちりばめ侍らんとて。序かゝむ事をこふ。余やむ事を得ず。ともこも幞ツキンのあかなれて。古くさい言葉をつぐに。つたなきこゝろの糸もて綴りなし。この書のはじめにかうぶらしむるとなん。

讚州 吾匏翁

(陰刻) 〔一三〕

近来俳諧風躰抄上

俳諧の事、余十四五歳の比よりもつぶやき習ひ、それより廿五六年、明匠達の申侍りし事を耳の底にとどめたる趣を、粗爰ホダにしるしたる也。さらに天骨を得たる事もなく、稽古もたらず侍る也。多年の好スキにて、世の人もさおもふにや、不思議の冥加にて、いまひろき難波の真中に住し、師範シカンの数に備はれる事、誠に高運也、面目也、とも存ずる也。毎月の月次、所々の興行に、梅翁師の膝下をはなれず、上手といはれし人にも立まじりて修行し侍る事、浅からぬ徳也。中比の名匠貞徳老の門人貞室・維舟・季吟など、各笑中に刃をかくしたるまじはり

にて、見ぐるしき聞えども多かりけるとなん。是、貞徳の質の及ぶ所也。今の梅翁老師は、連哥の高名かくれなく、俳諧(マコ)の寄妙古今にまれなれ共、生得に慢心の思ひなければ、凡天下に偏執なき名人也。其徳自然と門人に及びたればこそ、度々の席ゆるやかに、各花をゆづり月を残して、うつくしき事也。その交の中に見も聞もしたる事を此書に顯し、又国々より集り来たる句をも、ひとつに梓にちりばめぬ。猶たゞ広く人にも尋ね、故実口伝等をもならふべき事、哥道連俳の心もち也。この道の重き事をしらぬもの、目くら蛇に恐れずといへるごとく、口に任せていひちらす事、道の邪魔となりて、遠国波濤ハタウのすゑにはよき事也と思はん事、歎かしき事いふも愚か也。

一、連哥は哥より以前に初るといふ説有。後普光園殿の筑波問答に、

伊弉諾尊^{イサナギノミコト} 天のうきはしのもとにてはじめて会合の時、あなうれし、むまし乙女にあひぬ、との給ふに、伊弉冊の尊、あなうれし、むまし男に逢ぬ、と告給ふ。是を女神男神の続哥といふ也。連哥の初といふべきにや。又、日本武尊東夷征伐の時、甲州酒折宮にて

玕比磨利菟玖波瑠越底尹玖用加禰菟流^{ニヒハリツクバヲコステイクヨカネツル}

是を付申人なかりしに、火をもすわらハ是をつく。

加感奈倍底用玕波虚ノ能用比玕波菟瑠加瑠^{カガンナヘテヨニハコノヨヒニハトラカヲ}

この二句を連歌のはじめといふべきか。

一、連哥広く行ハるゝは、^(ママ)仁王十二代景行天皇の御宇よりともいふ

也。又其後、在原業平伊勢にて齋宮にあひ給ふ時、齋宮より出し給ふ
盗のさらにつる松のすみして、

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

齋宮

またあふさかの関はこゑなん

業平

宗祇は、是を連歌の初也と、角田河といふものに書給ふ。上古には百韻といふ事なくて、上の句をいへば下の句を付などしたる也。五十韻・百韻といふ事、梵灯菴・種玉菴の比より興起したる也。宗祇は紀州の人にして、伎楽師キガクの子也。東野州トウノヤシクに随ひて古今集の旨を伝受す。連哥にして花のもと々称する事、凡是をはじめとす。

人を送りてかへる鳥部野

身はいつの煙とたねと残るらむ

宗祇

是より煙の宮と号して、北野の末社に勧請す。其後救済グサイ・周阿など好士にて、専連哥繁昌せり。

一、建治の式、作者不詳。新式出来の後、是を本式といふ。いまも洛陽清水寺地主権現の法楽に、本式の連哥といふ事、毎月十八日寺僧執行せらるゝ也。代々の宗匠も、一度は是を行はるゝ也。本式の発句に

宗祇法し

水かほり花いさぎよき深山かな

宗艱の時代中絶しけるを、無念の事なりとて、紹巴にいたり執行せられし也。本式連哥の懷紙には、先おもてに十句する也。其内一句は名所をする也。四の折のうら六句、外の折は常の通十四句づゝ也。去嫌は和漢の式同じ。花、おもてに一づゝ、合て八本也。月は五句去にか程もする也。

一、新式の事、立水ふし水の草子といふものあり。後普光園の作也。